

## 海人手古良集について

三木麻子

## はじめに

『海人手古良集』は、藤原師氏の私家集である。

師氏は、『公卿補任』によれば、延喜十三年（九一三）生れ、天禄元年（九七〇）七月十四日に五十八才で薨じた。『尊卑分脈』には「号桃園大納言、号枇杷」と記される。その名が示すように、桃園に邸宅を持ち、『二中曆』には「桃園（二條大宮、園池以東并北、保光卿家、或抄云、師氏大納言之家）」とある。藤原仲平が枇杷を植えたことで知られる枇杷殿にも住んだということになるが、のちに道長のものとなる邸宅を師氏が所有したという確かな記録はなく、仲平女（敦忠室）から孫娘（延光室）へと伝領された枇杷殿で、源延光夫妻と同居したものと推測されている。<sup>（注1）</sup>ただ、師氏と枇杷殿との関わりは、上覚の著で建久九年（一一九八）成立とされる『和歌色葉』に「名譽歌仙者」として「後撰」枇杷大納言藤原師氏卿 小一條閔白貞信公御息<sup>（注2）</sup>とあるほか、「藤原定家による『集目録』に「あまのてこ□□〔枇杷大納言〕」、また、鎌倉時代末期の成立といわれる歌学書『代集』にも「枇杷大納言 あまのてこら」と見えている。

師氏は藤原忠平四男、兄弟には実頼ほか同母の師輔・師尹がいて、仲平には甥にあたる。室は醍醐天皇皇女、靖子内親王（源高明異母姉）で、一女を生む（二代要記）。また子息は雅明娘との間に親賢、ほかに近信、源信明娘との間に保信（保信は親賢の子としても載る）がある（尊卑分脈）。

その家集はどのように伝承されてきたのだろうか。

## 一、歌学書のなかの『海人手古良集』

前掲の『集目録』について、片桐洋一氏は、I「定家がみずから、あるいはみずからの監督下に書写した私家集の目録」もしくは、II「（ある時期の）定家所蔵の『私家集他目録』」、また、III「たとえば『新勅撰集』のような撰集を作るための資料リストとして定家が作った家集リストではなかったか」という可能性をあげて、その性格を明らかにされた。<sup>（注4）</sup>

『集目録』は書名「あまのてこら」に作者を注記することで、「枇杷大納言」が師氏の呼び名として通じたことを示し、九十七冊のリスト中に取り上げることで定家の関心を引く歌集のひとつであ

ったことを表した。そして『海人手古良集』はかつて尊経閣文庫にあったとされ、現在は所在が確認されない伝本であるが、春名好重氏の『古筆大辞典』に鎌倉時代初期、民部卿局（藤原定家女一八九五）によって書写された本が紹介されていること、定家監督書写本が存在したことが知られる。<sup>(注5)</sup>『海人手古良集』からみても、『集目録』は、定家本私家集の目録であったことになる。また、定家の撰による『新勅撰和歌集』には『海人手古良集』から四首が入集しているの、『集目録』が「撰集資料リスト」であった可能性を裏つけることにもなる。

定家の父俊成の『古来風躰抄』には、村上天皇の時代を「ときの大正よりはじめて、大中納言よりしもぎま、大納言にて西宮おとゞ〔高明〕、もろうちの大納言、朝忠の中納言など、ことになうたよみおほかりける……」と記しているし、順徳天皇による『八雲御抄』の伝本のなかには、巻一「学書」の末に「私記」として書物リストが後補されたものがあり、<sup>(注6)</sup>そこにも「海人手古良〔師氏垂相〕」とその名が見えている。

これらの資料によって、『海人手古良集』が目すべき歌集のひとつという理解があったことが認められる。

一方で、『代集』がその名をあげるの、やはり本のリストとしてではあるが、「物語」を集めたなかに「……源氏〔むらさきしきぶかけり〕 さ衣 枇杷大納言あまのてこら 宇治大納言〔隆国卿〕物語 浜松中納言 山蔭の中納言……」などとあがるのであり、『代集』には物語と誤解されていた可能性もある。

『海人手古良集』は、これら以前にも藤原清輔の『奥義抄』序に、

集はおほやけには奈良の万葉集をさきとして、拾遺及び金葉集にいたるまで世々にえらび給へり。私には山上憶良類聚歌林より新撰万葉集菅原万葉集、樹下集源賢撰といふまでに思ひく

のしわざしげく聞ゆ。此外の家集、柿本山辺氏をはじめて

海手古良師氏大 豊蔭一条撰 庵主増基らに及ぶまで、いくそばくぞと、数多いという私家集の中に、「豊蔭・庵主」と並んでその名をあげられている。三十六人集にははまらないもの、清輔にとつても私家集のなかで注目すべきものだったことがわかる。

しかし、同時に挙げられた歌集を検討すれば、北村杏子氏の指摘<sup>(注7)</sup>にもあるように、「豊蔭」が、一条撰政伊尹の私家集で、

おほくらのしじやうくらはしのとよかけ、くちをしきげすなれど、わかかりけるとき、女のもとにいひやりけることどもをかきあつめたるなり……

と、自らを「倉橋豊蔭」に仮託して編まれた物語歌集であり、「庵主」のほうも、増基法師の私家集であるが、

いつばかりのことにかありけん、世をのがれてころのままにあらむとおもひて、世のなかにききときく所をかしきをたづねて心をやり、かつはたふときところどころをがみたまつり、我が身のつみをもほろぼさむとある人有りけり、いほぬしとぞいひける、神無月の十日ばかり、熊野へまうでけるに……

と、熊野紀行を「いほぬし」が記す体裁を取ったところから始まるものである。「柿本山辺氏をはじめて」という「人麿集」「赤人集」はともかくとして、「くまで」という私家集は、仮名かめいを用いた、物語的歌集をあげているのである。現存の『海人手古良集』に物語的歌集のような箇所はないのだが、その集名だけで仮託、創作性を強く感じさせ、『代集』にも「物語」のなかに列挙させるような理解を与えていた可能性が考えられる。

## 二、仮名の私家集

師氏の甥に当たる藤原伊尹は、師氏より十一歳年少であるが、師氏の死（天禄元年（九七〇）の二年後に四十九歳で亡くなっており、伊尹自作とされる「豊蔭」物語の部分が作られた時期は、『海人手古良集』とほぼ同時期かとも思われるが、現在の『一条撰政御集』のかたちとなるのは、「伊尹の死後、彼とその周辺の詠草をまとめることのできる人物によって編纂された」と考えられている。また「いほぬし」の成立も「増基最晩年の正暦・長徳の交頃（注9）（九九三、九九五）」であるので、仮名による私家集は、それまでの物語的私家集の流れを受け、さらに新しい私家集の形態として師氏、伊尹の周りに認識されていたのではないだろうか。

橋本不美男氏は、歌物語的手法が加えられ、編纂された私家集として、作者没年順に、(1)『延喜御集』（醍醐天皇）、(2)『伊勢集』、(3)『元良親王集』、(4)『一条撰政御集』、(5)『本院侍従集』をあげ

られた。そして(4)『一条撰政御集』が、主人公を「大蔵史生倉橋豊蔭」という卑位微官の者に設定し、それに対する女性たちも実名を隠しているという点で、『海人手古良集』『増基法師集』の態度と軌を一にしていることを指摘されている。（注10）

(1)(2)(3)(5)は(1)「御門におはしましけるなかに、だいごときこえさせ給けるぞ」（延喜御集）、(3)「陽成院の一宮もとよしのみこ、いみじきいろいろこのみにおはしましければ」（元良親王集のように、実際の名をあげるものと、(2)「寛平みかどの御時、大宮す所ときこえける御つぼねにやまとおやある人さぶらひけり」（伊勢集、(5)「おぼえおはしけるかむだちめの次郎なりけるひと、年十八ばかりなるが、おぼえはいとかしこかりけれど、かうぶりえぬ有りけり、おほちは太政大臣にてなむおはしける、いもうとはきさきはらのみこに奉りて、藤つぼにぞさぶらひ給ひける、おほむいとこさぶらひ給ひけり」（本院侍従集）のように、人物の名を隠すもの）とに分類することができる。そしてこれらのように和歌作者が第三人称的に「男」「女」と記される「歌物語」を意識した私家集は、『後撰集』の時代に、橋本氏のご指摘にもある『敦忠集』・『師輔集』・『信明集』・『朝忠集』、さらに実頼の家集でありながら『清慎公集』とはことなる編集方針で編まれた『小野宮殿集』（注11）などが見えるものの、詠歌者を「男」「女」とすることと比べても、仮名をつけることはさらに物語に近づく、仮構化の方法であったであろう。

『私家集大成』および『新編国歌大観』の底本である書陵部本

『海人手古良集』(五〇一・四四八)など、『海人手古良集』の伝本のいくつかには冒頭に簡単な勸物があるものがあり、<sup>(注12)</sup>

海人手古良大納言師氏卿假名也。貞信公男天慶七參議、天徳四中納言、安和二大納言天禄元薨。

と記されている。続く書入れに、

あまのてこらは海士をとめなどいはん如し、謙退の称なるべし。てこ或はてこなとも万葉集におほく見えたる、皆女の通称ときこゆ、てこら・てこなラトナト通ズ、万葉たゞ子といふべきを、子らとも、子なともいへるごとし

とあって、師氏が自らを「海人」に仮託、身を窶して和歌を詠んだのだという通説があつたことも知られる。この前書きを持つ写本は、安永十年(一七八二)校合の奥書を持つ江戸期の写本ではあるが、「海士をとめ」集という名は、普通には大納言師氏の歌集名に付けられないものとしていて、『代集』の理解に通じるところがあつたようである。

また、さらにこれらの伝本は、前掲『奥義抄』を「家集、柿本山辺氏をはじめて海人手古良<sup>師氏大納言</sup>豊陰<sup>一条</sup>庵主<sup>集</sup>らに及ぶまで、いくばくぞ」と引用しており、「仮名の集」という認識で引いたことは確かだろう。

では、権門貴族の一員である師氏がなぜ、このような仮名の集を編んだのだろうか。

### 三、百首歌の製作意図

橋本不美男氏は、前掲の著書の中で、『安法法師集』の「のちの世に見む人は、すけるやうにおもふべけれど、おほくの年に……人しれずいひあつめたる言の葉、さまざまにつけつおほかれど、ただ一二ぞおぼゆるをかきあつめたるなり」という序の、自撰後の公開を意識している下りを引いて、同時期の歌物語語自撰集『一条撰政御集』と併せて、「権門・細流による公開を意図した家集の編纂は、専門歌人としての家風の意識とは別の、創作意欲からの、また『人知れずいひ集めたる言の葉』を記念として後代に残そうとする意図が生じたものと思われる」と指摘されている。<sup>(注13)</sup>

詠作の蓄積としての「集」ではなく、いわゆる純粹な「文芸」としての「創作意欲」を『海人手古良集』にも見ることは可能だろうか。

「はじめに」で述べたように、『海人手古良集』に物語的歌集の要素はない。『海人手古良集』の歌数は九十四首<sup>(注14)</sup>で、すべて題詠歌である。題は四季題(春夏秋冬各十首、秋九首からはじまり、「あはぬ恋」(十首)、「あひての恋」(九首)、「わかれ」(七首)、「無常」(いのり)(各九首)、「年」「月」「時」「日」「花」「春の風に驚むつる」(夏ほたるみぎはに火をとます)「池水かゝみににたる」(たまのひかりて井のなかにあり)「あふさかの関」(秋の月みづつかぶ」(各一首、計十一首)と続き、「いのり」までに約十首ずつを

配する構成で、百首歌として詠まれたと考えられている。

『海人手古良集』に先行する百首歌には、天徳末年（九六〇）頃（注15）に成立していたと考えられている「好忠百首」、「順百首」、成立は天徳五年（九六一）から康保四年（九六七）以前と推定される「重之百首」、これより少し遅れる「惠慶百首」などがある。そして仮名を用いている集としては、序文に永祚二年（九九〇）成立とあり、実際には長保五年（一〇〇三）以降の成立かとされる『千類集』もある。これらは初期百首といわれ、従来、この形式と集名によって、『海人手古良集』の性格が決定つけられていたように思われる。

従来の代表的な論のまとめとして『日本古典文学大辞典』平野由紀子氏執筆による「海人手古良集」（注16）の項を引用してみよう。

……書名について、宮内庁書陵部本の見返しに「あまのてこらは海人をとめなどいはん如し、謙退の称なるべし……」とある。身分の低い海人の女性に仮託している点、師氏自身の命名と考えられ、成立年不明だが、自撰とみられる……現存諸本すべて九十四首だが、原型は「百首歌」であったと推定されている。発生期の百首歌は曾祢好忠百首（天徳四年（九六〇）頃成立）以降、和歌発表の新形式として流行し、源順・源重之・惠慶・千頼らが百首歌を詠み、不遇な受領の訴嘆の具としての意味を持っていた。その形式を大納言になり得た師氏が、家集に採用したことは興味深い。それを、師氏が兄弟の中で政治家としての遅れをとった不遇意識に結びつけて

解釈する説もある。（注17）……

そもそも、「好忠百首」の序の、

あらたまのとしのみそぢにあまるまで……あれたるやどのひまをわけ、すぎゆくつきのかげをかずへつつ……月ひをのみもすぐすかな、あはれ、たつきありせば、もしもしきのおほみやつかへつとむとて……あしたゆふべになぐさめまし……かずならぬころをひとつなぐさめんと、ももちのかずをよみつづけ、あまたのことにいひつらねて……なをよしただとしてけれど、いづこそわが身、人とひとしきとぞや

という箇所や「ありへじとなげくものからかぎりあればなみだにうきてよをもふるかな」（好忠集・四二〇）から始まる沓冠歌の内容容は、いわゆる不遇意識を訴えての述懐であり、源順にはじまる応和の百首が生まれたことは先学のご指摘の通りであろう。その「不遇な受領の訴嘆の具」を、師氏が「家集に採用」したのはなぜか。兄弟や兄の嫡子伊尹にまで「政治家として遅れをとった」ことに直結させてよいのだろうか。

師氏は、延長七年（九二九）十七歳で侍従となり、以後、藏人頭、左近中将などを経て、天慶七年（九四四）参議、天曆九年（九五五）権中納言、天徳四年（九六〇）中納言に転じ、安和二年（九六九）に権大納言になった。伊予守、右衛門督、大和権守、春宮大夫、左兵衛督を歴任し、正三位、左衛門督兼春宮大夫兼按察使から、後の花山天皇の皇太子傳となり、大納言に至った（公卿補任）。大臣まで務めた兄弟（実頼（摂政太政大臣）・師輔（贈太政大臣）・

師尹（左大臣）と比べると、大納言の地位は劣るものではあるが、撰闕家の一員として最終的には皇太子傳という重要な役を務めたことになる。

この師氏について、北村杏子氏は、師氏の父、忠平の日記『貞信公記』と、兄師輔の日記『九曆』を検討し、若い頃の師氏が父と天皇の使者をたびたび務めるなど父に重用されたことや、弟師尹との二人を、父と兄は「兩宰相」「舎弟中納言二人」と称して二人一緒に扱っているなど、弟とも仲よく交わっていたのではないかと推量されている。また、師氏の人物像は、「むしろ我の強い独断的、専横的な」ものが垣間見られ、天皇を恐れる記事などから、その性格からして失言失策の類があつたとも思われると指摘される。想像をたくましくした点もあろうが、理由なき冷遇に「政権上の暗闘から身を引いた」（藤岡忠美氏説）人生で、女婿「高光の出家や、娘の死、官位争いでの敗北等」、応和の初年以来「世の無常、沈淪の嘆きの要因でないものはなかった」（山口博氏説）という従来の説に疑問を呈するものとして注目したい。

さらに、百首歌自体の性格も、物名歌や杳冠歌などを取り入れた詠歌内容の検討から、北村氏は、初期百首に遊戯性、俳諧性、卑近な用語や掛詞を用いた、滑稽な歌風などを指摘され、<sup>(注19)</sup> それを受けた金子英世氏も初期百首の顕著な特質を「同時代和歌には見出されない特異な素材や趣向が共有され、享受・展開されている」と指摘されている。<sup>(注20)</sup> 初期百首や、その背景にある文化圏の研究も進んでいる今、改めて『海人手古良集』の検討が必要となると思

われる。

#### 四、その構成と集名、内容

集名については、北村杏子氏<sup>(注21)</sup>のご検討もあるが、今一度整理しておきたい。

『海人手古良集』の「てこら」について、「てこ（こ）」は上代東国語で、「少女。おとめ」といわれ、「な」は親しみを表す接尾語で、「てこら」はそれが転じたものとなり、また「ら」は、自己を表す呼称にも付き、後世には謙遜の意も込められるようになるという（角川古語大辞典。「つらゆきらがこの世におなじくむまるとこのことの時にあへるをなむよろこびぬる」（古今集仮名序）とあるのと同様に、卑下の気持ちを表すと考えられるのである。

「てこら」の用例をみよう。伝「一条為氏筆本（天理図書館蔵）『好忠集』に「うつぎはらてこながぬのをさらせるとみえしははなのさけるなりけり」（四月中・一〇八）とあるが、<sup>(注22)</sup> 『夫木和歌抄』所引歌（夏・三三七九）では「てこら」となっている。冷泉家時雨亭叢書第七十二卷『素寂本私家集 西山本私家集』所収『実方中将集』<sup>(注23)</sup> には「イニシヘノアマノテコラガリヌノモサラセバサラヌモノニヤハアラヌ」（返し・二九二）と見える。また、万葉集・巻二の「吉備津采女死時柿本朝臣人麿作歌」の反歌「葉浪の志賀津の児らが 罷り道の 川瀬の道を見ればさぶしも」（二二八）は、書陵部蔵（五〇一・四七）『柿本集』に「さ、浪やしがのてこらが

まかりにしかはせのみちをみればかなしも」(二五〇)と載せられ、『拾遺集』哀傷部にも「さざなみのしがのてこらがまかりにし河せの道を見ればかなしも」(二三五)と「てこら」の形で載る。

本来『万葉集』に「古いにしへに ありけむ人の……妻問ひしけむ 勝鹿かたかの 真間の手児名まへ」(巻三・四三二、他四三三、三、巻九・一八〇七、八)と歌われた語が、「てこら」のかたちで平安時代にも見られるようになって、当時は文字通りの「いにしへ」を感じさせる言葉となっていたのではないだろうか。「海人」と名付けて、自分の和歌を謙遜しつつ、自分とは別の古人の集を気取る心が集名となったと思われる。

『海人手古良集』と『千類集』の仮名と主題の構成、詠歌の類似性を指摘された芝崎正昭氏(注24)が、仮名についてはその関係を、「漁民」に対する「農民」と定義され、『海人手古良集』の存在が『千類集』という仮名家集を生んだと指摘されたように、師氏が「漁民」に仮託したところに、貴族の日常詠を家集とするのとは異なる「創作意欲」を見るべきである。

その観点から百首歌の構成をみると、四季題、恋題、別と続く題は、四季・恋・離別・雑・賀と流れる勅撰集の部立配列への意識が感じられる。「無常」「いのり」の題が、この百首を「沈湍の歌」と見せていたのであるが、「別」・「無常」・「いのり」題からいくつか和歌をあげてみよう。

まず、「わかれ」と題する部立は、『古今集』、『後撰集』では「離別」であるが、『拾遺集』から『詞花集』まで「別」とする。地

方へ下る人との別れという主題は、『海人手古良集』にも共通していて、「わかれ」「わかれ路」をほぼ交互に繰り返すし、すべての詠に詠み込んでいるところに趣向が見える。

また、「無常」題は、『和漢朗詠集』の題には見えるものの、歌題としては、平安時代には『海人手古良集』にあるのが非常に早い例となり、「わかれ」題とともに『千類集』に引き継がれる。

しかし、『和漢朗詠集』が、①「よのなかをなになたとへむあさばらけこぎゆくふねのあとのしらなみ」(七九六・沙弥満誓、万葉集・卷三・三五一「漕ぎ去にし舟の跡なきごとし」)、②「てにむすぶみづにやどれるつきかげのあるかなきかのよにこそありけれ」(七九七・貫之、貫之集・九〇二)、さらに③「すゑのつゆもとのしづくやよのなかのおくれさきだつためしなるらん(七九七・良僧正、遍昭集・一五)の三首を引くように、無常観を詠む和歌はすでに多い。『順集』には、①をもとに、

應和元年七月十一日に、よつなるをんなごをうしなひて、おなじ年の八月六日に、又いつつなるをのこ子をうしなひて、無常の思ひ、ことにふれておこる、かなしびのみみだかわかず、古万葉集の中に沙弥満誓がよめる歌の中に、世の中をなになたとへんといへることをとりて、かしらにおきてよめる歌

が詠まれている。子を失った無常感から詠まれたものではあるが、「萩のうへの露」(二一九)から「あさがほの花」(二二〇)、「水のあわ」(二二二)と続く連作はひとつの趣向と見え、さらに『能宣

『集』に、「よのなかのつねなきをみて、万葉集のなかなる沙弥満誓が歌をもとにて、しものくをくはへて、したがふ、時文などしてよみはべりし」と題する十首が詠まれてもおり、創作意欲を充分に刺激するものでもあろう。

「空蟬の世にもにたるか花ざくらさくと見しまにかつちりにけり」(古今集・春下・七三・読人不知)や「こひしなばたが名はたたじ世中のつねなき物といひはなすと」(古今集・恋二・六〇三・清原深養父)のように、四季や恋の和歌のなかで詠まれてきた無常を、『海人手古良集』の九首は、『和漢朗詠集』②にひかれた貫之歌をもとに詠まれた、

むすぶ手のしづくににぐる月影の身と知りぬれば千世もいな  
いな  
(海人手古良集・無常・六六)

を初めとして、はかなさの喩えに「ともし火」(六八)、「月草」(六九)、「あさがほの露」(七〇)、「うたかた」(七一)などを用いる。『続後拾遺集』(哀傷・一二二九)に「水の面にうきてただよふうたかたのまだ消えぬまにかはる世中」と入集した七一番歌は、本集では、諸本が初句を「庭の面に」としており、「庭清み沖辺漕ぎ出づる海士舟の梶取る間なき恋もするかな」(万葉集・卷十一・二七四六)などと詠まれた「庭」を意識したものと思われる。『万葉集』で「海面」を意味する「庭」をわざわざ用いるところに、万葉表現を気取った言い回しと感じていた師氏の意識が感じられる。

また、続いて「沢のおもに年経るたづの千世を経て後は羽打つほどもなしとや」(七二)、「色深き峰の紅葉も山川の底に朽ち葉の

水屑とぞなる」(七三)と「羽打つほども」ない鶴と「朽ち葉の水屑」(みくづ)となつた紅葉を詠んで、長寿や美のシンボルが衰えるところに、これまでにない「無常」の喩えを見出し、「実もなしみどりも見えず……いづれも白き渚なりけり」(七四)と結ぶ。

『和漢朗詠集』は題「無常」から「白」へと続き、下巻を終える。この「白」題については「仏教の諸行無常、色即是空の理の寓意と解するか」という説が諸説のうちにあるというが、師氏詠は、本文がそのままでは理解しがたいところもあるものの(……)「部は諸本「すかはねし」、「いづれも白き」としたところは、当時の仏教観に基づく「白」の認識をもとに詠まれたものといえよう。

さらに、「いのり」では、  
さざれ石に生ひん世松にすをつくるたづのひなにも君はすみ  
なん  
(海人手古良集・七五)

あしたづの千世の齢をさしながら君にゆづるとなづくるかくも  
(八〇)

と、子どもの成長を祝い、長寿を寿ぐ和歌が詠まれ、これは「賀」部に相当するものである。

この同題の和歌は、故事を意識して詠まれたものを揃えている。「みどり子もいつしかかめの上にかよはん」(七六番歌)とあるのは『列子』や『列子伝』に見える故事により「亀の上」が「蓬萊」をさすことを踏まえているし、「斧の柄を手ならしめぬ君」(七七番歌)とあるものは「晋の王質」の故事で歌学書にも多く引かれる。「斧の柄」が朽ちるほどの長い時をいう。「みちとせになる



てふ桃」(七八番歌)は『興義抄』などもひく「西王母」の故事で「漢武内伝」から引く「三千年に一度実る桃」を詠み、「衣してなづる巖のつくるまで」(七九番歌)も、『菩薩瓔珞本業経』の「劫」という長い時の解説によつて知られる「きみが世はあまのは衣まれにきてなづともつきぬいはほならなん」に拠っている。「限りなき齢をのぶる浦島の子」(八一番歌)は『日本書紀』、『丹後風土記』や『万葉集』の「詠水江浦嶋子一首」(巻九・一七四〇)にも見える「浦島子」伝説をひいて、永劫の時を和歌に詠むのである。故事を多く用いて詠まれた「いのり」は、

君が世はなほ大原の小塩山松のこずゑもたのもしきかな

(八二)

昔より春日の藤の栄ゆれば今の使ひも挿頭なりけり (八三)  
二首で終わる。大原野神社、春日大社という、ともに藤原氏の氏神を祀る地の「松」「藤」を詠んで、天皇と藤原氏の栄えを寿ぐ姿勢であり、藤氏一族の要員の自覚がうかがわれる。

また、ここから『海人手古良集』は「好忠百首」の物名歌を踏まえるように、「とし」「月」「日」「時」と題した「物名歌」になつていく。続く「花」題は時との関わりもなく、「籬まきちかくううる花しもにほふかなこやこがらしの秋の初風」(八八)と和歌中に「花」の語はあるものの、これが物名歌であるとは判断できない。しかし、好忠、順の集の物名歌群の存在を見ても、また藤原輔相が『藤六集』という物名歌の歌集を編んだことを見ても、和歌を詠む際に、和歌技巧を凝らすという意味だけではなく、言葉の

「音」に対する関心が強かつた時代であつたことが知られる。師氏が、四首ではあるが、関連した言葉による「題」の物名歌を『海人手古良集』に置いたことに、師氏の和歌の言葉への知的関心を見ることのできるだろう。

さらに続く構成は、「春の風に鶯むつる」(八九)、「夏ほたるみぎはに火をとます」(九〇)、「池水かゞみににたる」(九一)、「たまのひかりて井のなかにあり」(九二)、「あふさかの関」(九三)、「秋の月みづにうかぶ」(九四)、と句題になつている。八八番歌「花」、九三番歌「あふさかの関」などはここに入ることに不審もあつて、このあたりからは、別の機会にまとめられた詠が附加された可能性も考えられる。

つまり、『海人手古良集』の百首歌の構成は、四季詠から始まる勅撰集の部立構成を受け継ぎ、百首歌の先例である「好忠百首」の構成を意識して作られたものと言えよう。特に、「物名」は、部立名としては『古今集』、『拾遺集』にあり以後には見えなくなる。その「物名」を持つ『古今和歌集』をその範としているといえるだろう。

ちなみに元永本『古今和歌集』では「賀」部の巻頭には「祈」と記されており、『海人手古良集』には平安時代の『古今和歌集』の部立名が投影されていると思われるのである。

## 五、「海人」は存在するか

前節四では、『海人手古良集』の集名は、権門貴族の私家集に見える恋愛歌集とは異なる、創作であることを印象づけるために古風な印象のある言葉で名付けられたと述べた。

また、その詠歌内容は、「わかれ」「わかれ路」を詠み込んだり、無常観の比喻を工夫したり、故事に拠って詠むことを主眼として、物名歌にしたりと、題毎の創作テーマがあつたように思われる。

四季部においてはどうかだろうか。そもそも「海人」を名乗るよ  
うな、大納言師氏を隠すような仮託の和歌はあるだろうか。

隠せどもおそき春べにひとりゐてながむる宮のうぐひすの声

(春・三)

とふ人も見えぬ蓬のもとなれど今はすみれのさかりなるかな

(五)

いとまなみ夜殿さしつる程もなく春の遊びに夜もよるとか

(六)

陸奥のまがきわたりは磯なめてわかめ刈りにぞあまも行きか

ふ

(七)

の「おそき春べにひとりゐて」、「とふ人も見えぬ蓬のもと」などに孤独感が詠まれ、特に五番歌には隠遁者の趣きがある。

また、六番歌の「いとまなみ」の語は、「蘆の屋のなだの塩焼

いとまなみ黄楊の小櫛もささず来にけり」(伊勢物語・第八十七段)

の古歌が名高く、「伊勢の海のあまのまてがたいとまなみ」(後撰集・恋五・九一六・源英明)と海女あまをたとえとして用いられるものである。そして、六番歌は、身分の低い者の詠として、「身分の低い私たちは(海人のように)暇がないので寝所を閉ざして休む、その程ない時から大宮人は春の遊びのために、夜も人が集まって行くとかいふことだ」というような詠が考えられる。

七番歌、春の「わかめ刈り」の景色には「海人」が登場するが、夏題には、

やをとめもけふやひとへに夏衣神のみそぎぞいそぎたつらむ

(一一)

かすならぬしづのたまきもおのがじし今はさなへのいそがし

(一五)

きかな

みだれずてこのしたやみに小倉山ふもとに鹿をとますかり人

(一六、結句「あき人」を校訂)

高瀬さす鶴飼も今はおりたちて水なつかしきかもものうは浪

(一八)

のように、「八乙女」、「早苗(に忙しい)賤」、「鹿」を照射して狩

る「狩人」、「鶴飼(する人)」などさまざまな立場で、卑俗の生業

に身をやつす姿勢が見える。

ところが、一方では、冬題に、

小忌かよふこのかさねに日影さし豊の明かりにみゆる妹か

な

(三五)

都へと行きかふ人の道もなみ年のせめてもいそがしきかな

(三三八)

もししきの大宮人も群れるつつ去年とや今日を明日は語らん

(三三九)

小忌衣をまとう官人や豊の明かりの舞姫を描き、また、「都へと行きかふ人」、「大宮人」の歳暮が詠まれていて、四季を通じて、師氏は、広い社会を描こうとしているように思われる。

それと同じく、「あはぬ恋」「あひての恋」では、

あふさかのかたき人には陸奥のさらに忽来をなづくるかもし

(四二)

と、「逢坂」・「陸奥の(さらに) 忽来」を詠むように、「清見が関の浪」(四二)、「陸奥のさはこの御湯」(四三)、「諏訪の湖衣の崎」(四四)、「常陸」(四五)、「伊奈」・「信濃なる浅間が山」(四六)、「東路の浜名の橋」(四七)、「生田の浦」(四八)、「あひての恋」でも「ゆるぎ」(五〇)、「葛城(の神)」(五一)、「武蔵なるささの山べ」(五三)、「美作やくめのさら山」(五四)、「駿河の富士の浦」(五五)、「陸奥の信夫(もちずり)」(五六)と、多くの歌枕が詠み込まれる。

逢坂の道に垣ほは越えながらまだ許されぬ下紐の関 (五八) と、最後に再び「逢坂」を詠みつつ、当時まだあまり使われることのない陸奥の「下紐の関」をも詠んで、最後の「線が許されないことを歎く」「逢ひて逢はぬ恋」の様相を描いている。

『海人手古良集』の歌枕表現は、曾根誠一氏が指摘されたように、全体で三一首三四例(ただし、曾根氏は「葛城(の神)」(五一)・「紀

の神」(八四)は省かれる)にも及び、初期百首の中でも目立つた特徴となつている。これも、仮構の場を感じさせるための工夫のひとつではなかつただろうか。

また、五節で見たような、「物名」への関心は、『古今和歌集』の尊重とともに、「詞」の表現技巧・言葉遊びを知的な遊戯として重んじる姿勢の現れと思われる。他の部立の和歌の中にも、「春のあそびによるもよるとか」(六)、「このしたやみにをぐら山」(二六)、「こきませなりや四方のたまがき」(二九)、「涙も袖にひたちなる」(四五)、「くめのみまさかいまさらに君」(五四)、「わくらばにあふかはあふか」(五六)、など、和歌にはあまり見えない表現や、地名への掛詞、同音の繰り返しなど、音の響きにこだわるところが窺えるのである。歌枕表現をも含め、和歌の技巧に工夫を重ねることも「創作」の一環であつたと思われる。

## 六、歌集のなかの師氏

以上、『海人手古良集』の性格の一端を明らかにしてきたが、『海人手古良集』が、完璧に百首歌として完成したものであつたかはさておき、師氏の目指したものは、作り上げる「歌集」であつて、そこが他の私家集とは異なる、まさしく百首歌のさきがけであつたのであろう。

では、師氏の実像、私生活はどこにも残されていないだろうか。勅撰集にみえる師氏詠は、後撰集1、新古今集1、新勅撰集4、

続古今集1、続千載集1、続後拾遺集2、新続古今集1（計11首）である。その他に、『貫之集』、『多武峯少将物語』にも師氏像が見える。

勅撰集歌には、『海人手古良集』にあるものが八首含まれている。そのうち『新勅撰集』は、四季部に一首ずつを『海人手古良集』から配して、定家の師氏詠に対する関心と「春夏秋冬」の題を持つことへの配慮が強く感じられるのである。

『海人手古良集』以外の詠を挙げる。

1 『後撰集』恋三・七六四

まちじりの君にふみつかはしたりける返事に、みつとの  
みありければつかはしける      もうぢの朝臣

なきながす涙のいとどそひぬればはかなきみづも袖ぬらしけ  
り

2 『新古今集』雑中・一六二六

少将高光、横河にまかりて、かしらおろし侍りにけるに、  
法服つかはすとて      権大納言師氏

おく山の苔の衣にくらべみよいづれか露のおきまさるとも

3 『続古今集』恋四・一二三四

中務がもとにいひつかはしける      大納言師氏  
ときどきぞしぐれもしけるよとにもわびつつふるはなみだ  
なりけり

このうち、1の『後撰集』歌は、「まちじりの君」の返事が「見  
つ」だけであったということ、「思いが達せられなくて」泣き流

す涙がたくさんあふれて加わったので、あなたの『見た』という  
お返事の言葉『（はかない）みつ（水）』だけでも袖を濡らすほどに  
なった」と訴えている。会えなくて悲しいので、手紙を読んでく  
れただけでもうれしいというのだが、工藤重矩氏が「平中物語二  
段に類似」と指摘されるように<sup>（注27）</sup>、「みつ」は『平中物語』のもと  
となったやりとりが『伊勢集』にあり、

おなじ女としごろいふともなくいはずともなきをとこあ

りけり、かへりごともせざりければ、としへにけるを、

なかみつとだにのたまはぬとはべりければ、このをん

なみつとなむなをばつたりける、たちかへり、をとこ

たちかへりふみゆかざらばはまちどりあとみつとだに君いは

ましや      （一九）

かへし

としへぬることおもはずははまちどりふみとめてだにみべき

ものかは      （二〇）

と、『見た』という返事だけでも欲しい」と願う男と、その男に

「みつ」とあだ名をつけてしまう冷淡な女性（それでも返歌は返して

いる）が描かれている。

『伊勢集』には、ほかに「このみつとつたりし人のもとよ

り」（二五詞書）とも、また、

人のみつとだにいへとありしかば

夢にてもみつとはいはじあさなあさなわがおもかけにはづる

みなれば      （二六〇）

というかたちの女の和歌も載せられている。

この「見つ」に「水(みづ)」を掛けたところに、師氏詠の工夫が見える。

また3の「ときどきぞしぐれもしけるよ」とともに「わびつつふるはなみだなりけり」(続古今集)も恋歌で、「時々は時雨も降るのに、いつまでも思い侘びながら、(夜もすがら)降っているのは私の涙なのですね」と詠んでいる。「ときどきぞ」する「時雨」に「世」とともに「降る」「涙」を配して、さらに、「時雨」が「時々ぞ」というのは、言葉の遊びを裏にかくして、「海人手古良集」の特色とも重なる、いかにも師氏らしい詠ということが出来る。

「よとともに侘」ぶと詠まれた「世とともに」は本来「この世があるかぎり、ずっと」と解される句である。しかし、

なきなたち侍りけるころ

よとともにわがぬれぎぬとなる物はわぶる涙のきするなりけり  
(後撰集・雑三・一一〇二・読人不知、伊勢集・一四三)

と詠まれた先行歌は、「濡れ衣」である「なき名(根柢のない浮き名)」であるが、私の「濡れ衣」は思いわびる「涙」が濡らしたものとこの機知の歌で、恋の歌であるために「世」に「夜」の意味も掛けられているように思われる。あなたに会えない夜に思いわびて流す涙という言葉の流れが、師氏詠にも受け継がれているのではないだろうか。(注2)

この二首の相手である「町尻の君」は師氏甥の一条摂政伊尹と、また「中務」は師氏兄の実頼や元良親王、源信明などの恋愛が

知られる女性で、彼女たちとの恋歌のやりとりは、華やかな王朝の恋物語のなかに師氏もその姿を残すことを伝えるものである。

ところが、3について曾根誠一氏は「何故これ程深い悲嘆の和歌を中務に贈ったのであろうか」と疑問を呈される。(注2)『続古今集』撰者の恋歌としての理解を、恋歌なら「中務に訴えかける具体的事象が詠まれるはずなのに、全く見られない」ことを理由に、恋歌ではないとして、『尊卑分脈』に師氏の子、もしくは孫として名が書かれる「保信」が「母陸奥守信明女」と注されるところから、源信明とその妻であった中務の間の娘が「陸奥守信明女」で、彼女の早世の可能性まで考えられ、子(もしくは孫、保信)の母の逝去をその母(祖母中務)に歎く歌である可能性を考えられている。信明(九一〇年)、中務(九一二年)、師氏(九一三年)は近い年の生まれであるので、可能性として否定できないまでも、「中務に訴えかける具体的事象が詠まれるはず」という前提が予測できないので、恋の嘆きを大仰に訴えた、恋の駆け引きの歌としての理解も、依然として可能であると思われる。

さらに、『後撰集』(冬・四八〇)には、

師氏朝臣の狩して家のまへよりまかりけるをさきて

よみ人しらず

白雪のふりはへてこそとはざらめとくるたよりをすぐさざらん

という、鷹狩りをしての帰り、女の家の前を通りすぎる師氏を呼び止める詠も載せられている。これも、『海人手古良集』では見

ることのできない、貴族男性としての師氏像である。

また、天理図書館蔵『貫之集』（二類本）には、

ももそのの宰相君御もとより、火うちにたきものをくは  
へてもものへつかはさんとてめせるに、たてまつる

をりをりにうちてたくひのけぶりあらばころざすかをしの  
べとぞ思ふ (五九)

師氏宰相の君のめしけるにたてまつる二首

我にしも草の枕はこはなくにもものへときくはをしくもあるか  
な (六〇)

君がゆくところをきけば月見つつをばすて山ぞ恋しかるべき  
という詠が見える。<sup>(注30)</sup> (六一)

陽明文庫本『貫之集』（二類本）では、「ものへ行く人にひうち  
のぐしてこれにたきものをくはへてやる」、「しなのへ行く人に馬  
のはなむけせんとて」とあり、師氏は地方へ下向する人に、火打  
ちの道具と練り香を贈り、饗別の宴をしようとするのである。

師氏が宰相（参議）である時の貫之の詠であるが、師氏が参議  
になった天慶七年（九四四）年は、貫之の没年、天慶九年（九四六）  
以前である。他本では師氏は「少将」「中将」とも書かれるが、一  
類本では、当該歌の次に位置する歌の詞書に「もろまさの侍従」  
とあって、師氏が少将の期間（承平四年（九三四）から天慶四年（九  
四一）と、師尹が侍従の期間（承平五年（九三五）から承平七年（九  
三七））が重なる。師氏の呼称は異なっても、貫之晩年に、歌人と

しての高い評判も定着していたであろう貫之などの専門歌人から  
和歌を召して遣わすような、上流貴族としての関わりがあったと  
知られる。これは、公的生活のなかの師氏であるが、摂関家の一  
員としての姿をみせるものであるだろう。

ところで、『後撰集』という師氏の生存中に成立した歌集に描  
かれる姿と、2『新古今集』の師氏はいささか異なっている。

「少将高光、横河にまかりて、かしらおろし侍りにけるに、法  
服つかはすとて」とある高光は、師氏の兄師輔の息子で、師氏の  
娘を妻としている甥である。比叡山、横川で出家し、のち多武峰  
に入り、『多武峰少将物語』の主人公として描かれる。貴人であ  
りながら、二十三歳で突然出家してしまう高光に、その妻も幼い  
娘も驚き悲しみ、その親としての師氏一族の悲しみも『多武峰少  
将物語』に記されるのである。

『新古今集』歌は、『高光集』（四五）にも、「中納言殿より、か  
はりたる御さうずくして山へたてまつるとてたてまつりたまひけ  
る」（四四詞書）に続いて、「なほなほ」の詞書で載るが、この「中  
納言殿」は師氏をさすと見える。師氏は、天曆九年（九五五）権  
中納言、天徳四年（九六〇）師輔が薨じた際に、正中納言となっ  
ており、高光出家は、父師輔の死後応和元年（九六二）十二月の  
ことである。

また、同歌は『多武峰少将物語』<sup>(注31)</sup>にも載せられている。  
奥山の苔の衣にくらべみよいつれか露のおきはまさると  
しかし、ここでは、同歌は、

さて中納言殿の北の方、この君の御装束、袈裟よりはじめて一  
くだりせさせ給ひて、これ山へ奉りければ、山へ奉りたまふ。

「この御衣どもの、いとあはれなれば、忘れては誰がことぞと  
おぼめかれつる」

とあって、『高光集』四四番歌が書かれた後、やはり「なほなほ」  
として載るのである。

和歌作者が、師氏と、師氏北の方と異なっていることになるが、  
この点に関しては、笹川博司氏が『中納言殿』は藤原師氏の第  
宅」と注した上で、「場所を表す名詞として用いられた『中納言  
殿』が『新古今集』などでは人を示す名詞と解され、師氏その人  
を指すようになっていったのではあるまいか」と指摘され、『多  
武峰少将物語』のほうが信憑性が高いと言われている。<sup>(注2)</sup>

師氏北の方から贈られた和歌が『新古今集』で師氏詠とされ、『海  
人手古良集』の一部の伝本には、<sup>(注3)</sup>『新古今集』から採歌された同  
詠が付加されている。

ともあれ、『多武峰少将物語』では、高光の子、師氏には孫娘  
にあたる姫君をみて、

あしひきの山なる親を恋ひてなく鶴の子見れば我ぞ悲しき  
かたにても親に似たらば恋ひ泣きに泣くをみるにぞ我も悲し  
き

と悲しむ姿があり、また、北の方同様、「白銀の花瓶」を四つ作  
り、高光に贈り、高光を思つて涙を流す。

山の端はかくしもあらし君がため都の花は折れば袖ひつ

ところで、師氏は、悲しみのために出家をも考える娘に、

舟流すほど久しといふなるをあまとなりてもながめかるてふ  
という歌を送っている。「舟を流して悲しむ海人のように、あな  
たは(久しく)悲しむというが、尼になつても、海人は長海松を  
刈るのだから(眺めをする、尼になるのはおやめなさい)」という詠は、  
次の、

おきつなみ あれのみまさる 宮のうちは としへてすみし  
いせのあまも 舟ながしたる 心地して よらむ方なく か  
なしきに……  
(古今集・雑体・一〇〇六・伊勢)

による。また、『蜻蛉日記』作者が高明室愛宮へ贈った、

きみもなげきを こりつみて しほやくあまと なりぬらん  
ふねをながして いかばかり うらさびしかる よの中を  
ながめかるらん……  
(蜻蛉日記・安和二年)

にも同様の表現「ふね流す」、「長海松刈る」が見える。この時期  
に詠まれた「海人」を勘案すると、『海人手古良集』の背景に、生  
活者としての海人を哀しむ事と同様に、生ける者として高光と師  
氏女を思う悲哀はあるだろう。

しかし、順の子を失った無常感が「世の中をなにとへむ」  
連作に結びついたように、詠歌は、愁訴ではなく、新たな創作で  
あつたと思われる。「世中にある人ことわざしげきものなれば、心  
におもふことを見るものきくものにつけていひいだせるなり」  
(古今集假名序)とは貫之の言であるが、「心におもふこと」は、百  
首歌を創作する契機のひとつであり、その言語の響きに重点を置

き、和歌技巧を凝らした百首から、師氏の創作趣向を汲み取って  
いくべきであると考えている。このような観点から試みた注釈と  
ともに、ご批判を賜りたいと思う。

\*本稿は、片桐洋一・岸本理恵・藤川晶子各氏との共著『海人手古良  
集新注』（青簡舎より刊行予定）の成果を踏まえたものである。

\*『海人手古良集』の集名は伝本により「海人手古良」「海人手子良」  
と表記されるが、本稿では『新編国歌大観』・『和歌集大成』に統一  
して「海人手古良」を用いた。

\*歌集の引用は特に断らない限り、『新編国歌大観』によった。万葉  
集は『新編日本古典文学全集』（小学館）により、旧番号で記した。  
また『海人手古良集』本文は、冷泉家時雨亭叢書第二十卷『平安私  
家集七』所収「唐紙本 海人手子良集」を底本とし、諸本を校合し  
て整理した。

## 注

- (1) 野口孝子氏「枇杷殿」、『平安京の邸第』（望稜舎・一九八七年）  
所収。  
(2) 『日本歌学大系』（風間書房）。以下、歌学書は特に断らない限り  
『日本歌学大系』による。  
(3) 冷泉家時雨亭叢書第十四卷『平安私家集一』（朝日新聞社・一九  
九三年）所収。  
(4) (注2)『平安私家集一』解題。  
(5) 該本は、山口博氏による『私家集大成』『海人手古良集』書籍版  
解題では「その本は前田家蔵といわれているが、扉は定家筆で、

本文は民部卿局筆の海人手子良集らしい。しかし前田家には現  
存せず所在不明である」、『新編国歌大観』解題でも「定家本は  
前田家蔵で、扉は定家筆、本文は民部卿局筆であったというが、  
今は所在不明である」と記されている。

- (6) 久曾昇昇氏「校本八雲御抄とその研究」（厚生閣・一九三九年）  
は、増補は「吉野時代（南北朝）以前に行はれた」とする。

- (7) 『海人手古良集の題名及び諸本、付校本』、『関根慶子教授退官記  
念寢覚物語対校 平安文学論集』（風間書房・一九七五年）所収。  
(8) 片桐洋一氏「新編国歌大観」解題。

- (9) 増淵勝一氏「新編国歌大観」解題。

- (10) 「物語文学と家集」、『王朝和歌 資料と論考』（笠間書院・一九  
九二年）所収。

- (11) 片桐洋一氏「小野宮殿集」解題、冷泉家時雨亭叢書第十九卷『平  
安私家集 六』（朝日新聞社・一九九九年）所収、「冷泉家時雨  
亭文庫蔵『小野宮殿集』の構成と成立」（関西大学『国文学』78  
号・一九九九年三月）、参照。

- (12) 他に、龍谷大学写字台文庫本・東京大学本居文庫本・ノートル  
ダム清心女子大本・天理図書館本に同様の書入れがあり、天理  
大学図書館春海文庫本には勅物部分だけがある。書陵部本と他  
の四本にある「安永十年（一七八二）校合」部分は春海文庫本  
にはなく、「定家自筆本云々」の奥書は持つもの他五本とは別  
グループに属する。

- (13) 「勅撰集と私家集」、所収は（注10）に同じ。

- (14) 書陵部本および（注12）にあげた伝本には、巻末に一首が付加  
されているが、巻頭勅物書入れと同じく、本来はなかったもの  
である。

- (15) 初期百首の先行研究には以下のようなものがあり、成立時期な



どは以下の諸論文による。

藤岡忠美氏『平安和歌史論―三代集時代の基調―』（桜楓社、一九六六年）。

山口博氏『王朝歌壇の研究―村上・冷泉・円融朝篇―』（桜楓社、一九八二年）。

北村杏子氏（注7）論文他、①『海人手古良集と藤原師氏についての雑考』、峯村文人先生退官記念論集『和歌と中世文学』（東京教育大学中世文学説話会、一九七七年）所収、②『初期百首の形成と性格』（『平安文学研究』第六五輯、一九八一年六月）。

芝崎正昭氏『千穎集』への疑問―『海人手古良集』との関係をめぐる―』（『王朝文学研究』第六十四輯、一九八〇年）。

金子英世氏①『千穎集』の位置―初期百首との関係を中心に―（『和歌文学研究』第六十四号、一九九二年一月）、②『初期百首の季節詠―その趣向と性格について―』（『国語と国文学』、一九九三年八月）。

松本真奈美氏『重之百首と毎月集』（『国語と国文学』、一九九二年十月）など。

また、曾根誠一氏には、次のような『海人手古良集』の全歌の注釈および研究があり、木船氏の一部注釈もある。

- ①『海人手古良』春部・試注（『花園大学国文学論究』第19号、一九九一年一月）、②『海人手古良集』の和歌欠脱箇所について（『花園大学国文学論究』第21号、一九九三年一月）、③『海人手古良集』夏部・試注（『花園大学国文学論究』第21号、一九九三年一月）、④『文明』二年奥書本『海人手古良集』の本文について―天理大学付属図書館蔵本の異本注記本文の紹介―（『中央大学国文』37号、一九九四年三月）、⑤『海人手古良集』秋部・試注（『花園大学国文学論究』第22号、一九九四年一二

月）、⑥『青山会文庫本『泉郎手古良集』の本文について―永正

三年奥書本系群書類従本との比較を通して―（『花園大学文学部研究紀要』第27号、一九九五年三月）、⑦『海人手古良集』冬

部・試注（『花園大学国文学論究』第21号、一九九五年二月）、⑧『安永十年校合本系『海人手古良集』本文考―宮内庁書陵部

本を中心として―（『花園大学文学部研究紀要』第28号、一九九六年三月）、⑨『海人手古良集』「あはぬ恋」部・試注（『花園大学国文学論究』第24号、一九九六年一月）、⑩『海人手古良集』「あひでの恋」部・試注（『花園大学国文学論究』第26号、一九九九年三月）、⑪『海人手古良集』「無常」部・試注（『花園大学国文学論究』第27号、一九九九年二月）、⑫『海

人手古良集』「いのり」・物名部試注（『花園大学国文学論究』第28号、二〇〇〇年十二月）、⑬『海人手古良集』題詠・補遺

歌 試注（『花園大学国文学論究』第29号、二〇〇一年二月）、⑭『小沢盧庵の家集収集と入江昌喜―架蔵本『海人手古良集』を手懸かりとして』（『花園大学国文学論究』第32号、二〇〇四年

二月）。

木船重昭氏『王朝私家集本文校訂注釈研究（四）―海人手古良集（一）―』（『中央大学文学部紀要』第18巻第3・4合併号、一

九八四年二月）。

(16) 一九八三年、岩波書店。

(17) (注15) 藤岡氏、山口氏説など。

(18) 『藤原師氏瞥見』（『解釈』11月号、一九八四年一月）。

(19) (注15) 北村氏②論文。

(20) (注15) 金子氏②論文。

(21) (注7) 論文、(注15) 北村氏②論文など。

(22) 『私家集大成』CD-ROM版（エムワイ企画・二〇〇八年）の

- 解題〔新編補遺〕（田中登氏）に新たに翻刻された「好忠Ⅱ」（伝西行筆卷子本曾丹集切）の本文も「てこな」となっているが、『曾補好忠集全釈』（神作光一・島田良二著、笠間書院・一九七五年）では、伝為相筆本が「てこら」とあるところからも「てこら」の誤写かと指摘される。
- (23) 四節の私家集引用は『私家集大成』CD-ROM版による。
- (24) (注15) 芝崎氏論文。
- (25) 大曾根章介・堀内秀晃氏『新潮日本古典集成 和漢朗詠集』解説。
- (26) 関西平安文学会・一九九七年九月例会口頭発表「『海人手子良集』の歌枕表現について」。
- (27) 和泉古典叢書3『後撰和歌集』（和泉書院・一九九二年）頭注。
- (28) (注15) ⑬論文で曾根氏は贈答の相手が中務であるところからその母伊勢の歌を踏まえた可能性が高いと指摘されている。
- (29) (注15) ⑬論文。
- (30) ただし、一類本（歌仙歌集本・陽明文庫本）では、「もろきの中將」、「おなし少將」、西本願寺本では「師氏少將」、「おなし少將」、書陵部本では「もろうちの中將」、「おなし中將」となっている。
- (31) 笹川博司氏『高光集と多武峰少將物語―本文・注釈・研究―』（風間書房・二〇〇六年）による。
- (32) (注31) に同じ。
- (33) (注14) 参照。